來鮮した賓客の印象[[1]](#footnote-1)

徳富蘇峰先生に會ふの記

香山光郎

私が初めて徳富蘇峰先生にお目にかゝつたのは大正五年の夏で[[2]](#footnote-2)、今から二十七年前であつた。當時先生は五十四歳の中老で、私は二十五の青年であつたはずだが、今年先生は八十の高齢に達せられて、數日前東京で盛大な祝賀會があつたさうである。

釜山埠頭で初めてお逢した時にも、先生は已に白髪であつたし、顔の筋肉にも痙攣があつて片方の眼や頬が話されるたんびにびくびくひきつゝてゐた。

二度目にお逢したのは東京の國民新聞社の樓上で、そこには珠淵と落款のある李太王殿下の横□や、日露戰爭を計劃した時、桂首相がかいた墨の滿洲地図などが掲げられてあつた。

その後は先生の一生の仕事場である銀座の民友社にも二三回お尋ねしたことがある。民友社の先生の應接間や書齋は文字通り書籍で一杯だ。先生自身の著作だけで數數百種に上るであらう。實に「文章報國」の一生である。しかもそれらの製作は　天皇中心主義で一貫されてゐる。現に執筆中の日本國民史だけでも、われらが一讀するのにも一年はかゝるだらう。

先生は私に逢はれる度に、いつも二つのことを申された。政治に關係するな　天皇中心主義者になれ、といふことである。

私が最近先生にお逢したのは昭和十一年の春であつたが、

「朝鮮の歴史を書け。朝鮮の立場から見た東洋史を書いて見よ」

といはれた。しかし私はその嘱望にお答へ出來ずに居る。

私はたつた一度大森山王の、先生のいはゆる山王草堂を訪れたことがある。先生は旅行中であつたが奥様には始めてお目にかゝれた。ステツキが何百本も立てられてあつたが旅行の記念なのであらう。山王草堂は、家は小いが庭園は廣く老樹さへも鬱蒼としてゐた。

徳富先生は阿蘇山の名物になつたほど有名だ。日本の國老であられる。煙草も酒も親まず、娯樂とては富士山や熱海の海を眺めることで、あとは讀書と著述ださうだ。今は眼が見えず、速記者に筆記させることによつて著述を継続されてゐる。

漢文學にも、英文學にも造詣深く、漢詩もよくせられ、朝鮮史にも詳しい。何しろ八十年も勤勉努力されたのだ。

私は先生の八十のお祝に

「文名冠一世。三代勤皇人。八十春來意。千秋史筆年新」

と書いて差上げた。

1. 『大東亞』14-3、1942年5月。前書は以下の通り。「我が半島に親しく來られた政治家、學者、作家、藝術家は何十と數へらる、其の中で半島識者に最も深き印象を與へた方々の面影を偲びつゝ號を逐ふてこの印象記を連載することにする（次號繼續）徳富蘇峰…李光洙　作家島木健作…崔貞熙　山本改造社長…朱耀翰」 [↑](#footnote-ref-1)
2. これは李光洙の記憶違いで、実際には大正6年、『無情』を連載した年である。 [↑](#footnote-ref-2)